

タイトル	学芸の愛 - テレングト・アイトルさんを送る言葉 -
著者	郡司, 淳; GUNSHI, Jun
引用	北海学園大学人文論集(78): 35-42
発行日	2025-03-31

学芸の愛

— テレングト・アイトルさんを送る言葉 —

郡 司 淳

その夜はひどい吹雪だった。夕食の終わった人気のない寒い食堂で、Kとわたしは、聞き手が集まるのを待っていた。ところが、話を始める予定の時間になっても、さらにそれから三十分も待っても、聞き手は一人も来なかった。わたしはKに気の毒で恐れ入った。しかしKはおだやかで静かだった。Kはたゞ一人の聞き手であるわたしのために、くず紙をとじた手帖を開いて「エスペラント語入門」の話しをはじめた。一先ず「わたしの愛するエスペラント語について話す機会を与えてくれたカンさんに感謝します」と前置きして。

Kの話は、きわめて系統的で内容豊かであった。

一、エスペラント語の発生

二、文法の基本

三、エスペラント語の国際的意義

四、日本におけるエスペラント語研究の歴史

五、エスペラント語の研究文献

に就いて、二時間位Kは語った。最後に、ゲーテの「野バラ」のエスペラント語訳を説明し、「エスペラント歌」を二回唱ってくれた。冷えきった食堂にひろがる澄んだKの声を、わたしは、「学芸の愛」そのものとして感じたのであった。

それからしばらくしてKは他の収容所に移された。別れる時、わたしに「野バラ」と「エスペラント歌」を書いてくれた。

こういう美しい魂と一緒になくても、すぐ引き離されてしまうウオエンノプレニクの身の上のはかなさを、その時ほどひどく感じたこ

とはなかった。

菅季治『語られざる真実』筑摩書房、1953年

I

アイトルさんは、私が2004年4月に北海学園大学人文学部に赴任して最初に親しくなった同僚であった。当時、氏は独身で、私も1年目は単身赴任であったから、昼は食事を共にし、夜は酒を飲み交わすといったように、それこそ四六時中、一緒に行動していたといっても過言でない。

アイトルさんは右も左もわからない私に札幌の街を案内してくれた。検討に検討を重ねて購入したマンションに私を招待し、同じく熟慮の末に買い求めた加熱水蒸気オーブンレンジで調理した羊肉とワインでもてなしてくれた。さらには、私に博士論文を書かせるため、3年目の入試委員まで志願してくれた。怠惰な私は、結局、自分が入試委員のときに書く羽目になったけれど。私は、2009年3月によりやく博論を刊行した際、アイトルさんに対して次のような謝辞を「あとがき」に記した。

畏友テレングト・アイトル氏には、是非に感謝の念を伝えたい。氏の励ましと無言の圧力——それは時に六〇〇〇マイル離れた在外研修先のロンドンから行使されることもあった——がなければ、到底書き上げることができなかったと自覚している。内モンゴル出身の氏との邂逅には、共に戦争の時代を生きなくてはならなかった氏の御尊父と私の父の代からの不思議な縁を感じる。北の大地で、氏との出会いに恵まれ、つくづく有り難かったと思っている。

これに先立つ2007年4月、アイトルさんは在外研修で、1年間ケンブリッジ大学に出かけた。私の別れの言葉に涙を浮かべたアイトルさんは、しかし翌年、意気揚々と帰国した。さらにその翌年、海外で研究に打ち込んだ者には罰として負担の重い委員を押しつけるという、人文学部の奇妙

な慣行により、アイトルさんは教務委員になった。私が教務委員2年目のことであった。

教務委員としての日々は、アイトルさんの「なぜ、私がそれをしなければならぬの？」との疑問の言葉に始まり、私との押し問答の末に、氏が「理解できない」といったようにかぶりを振って終わるのが常だった。そのような毎日の繰り返しに二人とも疲れ果て、次第にギスギスした関係となり、とうとう中華料理屋の地階における口論から取っ組み合いの喧嘩にまで発展した。

アイトルさんは減法強かった。私はいともたやすく組み伏せられた。その刹那、アイトルさんが「俺は」と口走った言葉は、墓まで持っていくことにする。

Ⅱ

2011年、とある出来事によって、アイトルさんとの関係は断ち切られた。その後、同僚としての最低限のつきあいにまで関係は修復されたが、アイトルさんが結婚したこともあり、もはや食事をすることも酒を飲むこともなくなった。

しかし、2016年の春、アイトルさんはモンゴルに一緒に行かないかと誘ってくれた。前年に北海学園大学とモンゴル文化教育大学の間に締結された協定に基づき、ウランバートルにある同大学を友好訪問し、あわせてその教育内容や現地の様子を視察するのが目的だった。それは、アイトルさんの内モンゴル大学外国語学部日本語文学科の2年後輩にあたる、理事長牧原創一氏の要請によるものであった。

私は、同行を促すアイトルさんの意図を察したから、その誘いを即座に承諾した。6月26日から7月1日までのわずか6日間の旅であったが、終生忘れえぬ思い出となった。本来の出張業務のかたわら、シベリアに抑留された日本人俘虜によって建設されたモンゴル国立劇場において民族歌や舞踏、オーケストラ演奏を鑑賞し、ウランバートルから車で1時間半の



図1 シリンボラグ・ツーリストキャンプにて
左からアイトル氏、牧原理事長、筆者、モンゴル文化教育大学の学生

場所にあるエレデネ村のチングス・ハーン騎馬像と展示施設を訪れた。モンゴルの伝統料理であるホーショールやボーズに舌鼓を打ち、遊牧民の家で馬乳酒をご馳走になり、草原や原始林を散策してゲルで寝た。私がモンゴルの歴史と文化、生活を体験できるように、牧原理事長が周到に準備してくださった旅程であった。

上の写真（図1）は、モンゴル文化教育大学が運営するシリンボラグ・ツーリストキャンプにおける一齣である。私にとっては上野動物園以来の乗馬体験であった。ちなみに、私の乗った馬の手綱は、学生氏が握っている。モンゴルにおける収穫のひとつは、私には自然のなかで生きる力がまったく備わっていないのを思い知らされたことであった。

他方、モンゴルでは、多くの方と親しく接する機会を得たが、誰もががー様に誇り高く、かつ素朴であるのが強く印象に残った。ベートーヴェンやショスタコーヴィチ、ムラヴィンスキーのような音楽をとおしてようやく感知しえた存在を、私はそこに感じ取った。

確かあれば、政府宮殿前のスフバートル広場において、路線バスを待つ

ていたときの出来事ではなかったか。ぼんやり人波を眺めていた私に、牧原理事長がモンゴル（外モンゴル）を初めて訪れた際、「モンゴル人の軍隊を見て感激しました」と語りかけた。すると、アイトルさんは、「俺は、周りの人がみんな、モンゴル人なのに涙が出た」と応じた。私は頷き、二人が歩んできた道のりに思いを馳せた。

Ⅲ

アイトルさんの御尊父は、アジア太平洋戦争中、日本の傀儡政権であった蒙古連合自治政府のもとで、日本語を学ばれた方だった。戦後、1947年に中国共産党の指導によって成立した内モンゴル自治区において公安関係の要職に就かれたが、1966年に始まった文化大革命により、アイトルさんの御母堂をはじめとする多くのモンゴル人と共にその職を追われた。

1956年生まれのアイトルさんの十代は、この文革の時期と重なる。少年時代のアイトルさんは、御尊父の失脚をきっかけとして世の不条理に不満を抱き、当初はガキ大将を振る舞って革命派の少年たちと喧嘩を繰り返したが、文革が深化するにしたがって孤立を余儀なくされたらしい。アイトルさんが生まれ育ったシリングル盟タイプス旗のモンゴル人は、中華人民共和国政府が1949年の建国以来行ってきた漢人の大量移住によって当時すでに少数派に転じていた。

しかし、そうしたアイトル少年に転機が訪れる。ある日、一家が燃料の支給を絶たれたために牛糞集めに出かけた少年は、その途次、思いかけず遊牧民の伝統的な葬法である風葬の跡に出会う。サレコウベが草原に点在するその光景が、アイトルさんの死生観を決定づけ、自らの文学研究の原点となったという。アイトルさんは、この体験によって世事を超越し、内的世界に沈潜していった。学校は革命派の拠点となったため、中学2年を最後に通うのをやめ、働きながら勉強を続けるかたわら、御尊父による読書の勧めに応じてロシア文学をはじめとするさまざまな本を読みあさった。

1976年、そのようなアイトルさんの未来に希望の灯が点る。文革が毛沢東の死と四人組の逮捕によって事実上終わりを告げたからである。これにともない、翌年、文革が始まって以来停止されていた大学入試が再開され、翌々年には全国統一入試も復活した。こうした状況のもとで、アイトルさんは外国語学部に入學すべく日本語を勉強しようと決意する。この選択は、かつて御尊父が歩もうとして果たせなかった道を辿ろうとするものであった。

日本語の勉強は、アイトルさんに私的な記念日として記憶された1978年10月1日午前10時、御尊父より五十音図を暗記するように教えを受けたことに始まる。アイトルさんは、「青春の最後のチャンスか、あるいは最後のあがきと思う一方、日本留学の夢を少しずつ膨らませ」ながら、母語による日本語教科書が皆無であったため、中国語版教科書を丸暗記して試験に臨んだという。翌年7月に実施された統一入試の結果、この年新設された内モンゴル大学外国語学部日本語文学科を志望し、9月に第1期生として入学を果たした。ちなみに、内モンゴルにおける戦後の日本語教育は1972年の日中国交正常化を契機として始まるが、アイトルさんが入学した日本語文学科は、日本語のみならず日本文学も学ぶことのできる唯一の学科として開設されたものであった。

現在を遡ること45年、こうしてアイトルさんの日本文学の旅が始まろうとしていた。

Ⅳ

かつてアイトルさんは、氏の博士論文である『三島文学の原型——始原・根茎隠喩・構造——』（日本図書センター、2002年）において用いられたテキスト分析について、「誰がやっても同じ結論になるんだよ」と語ったことがある。私は「物語をどう読み解くか、主体的な解釈の問題ではないのか」といった疑問を口にした。すると、アイトルさんは「それはその先の問題で、私はやらないんだ」と答えた。

アイトルさんにとって、学問とは客観的なものでなければならなかったのであろう。あるいは、理性によって論理的に説明されつくされねばならないもの、というべきか。アイトルさんは、国家・民族から個人にいたるまでいかなる恣意も介在しえない世界を、学問の理想として求めたのであった。だから、文学における詩的狂気や靈感、想像力の超越性を説き、克服されるべき対象としてのミメシス、リアリズムとの関係を東西の壮大な比較文学史の構図として提示しても、そこに分け入って文芸作品を解釈することを自制したのではなかったか。アイトルさんが嘗めた辛酸を思わずにはいられない。しかしそれゆえに、私は近い将来、ほかならぬ三島由紀夫の文学で、アイトルさんの話を聞きたいと切に願っている。

アイトルさんほど学問を愛した人を私は知らない。そして、間違いなく、学問の女神ムーサに愛でられた人である。アイトルさんは真理を探究することでもことの自由を得たのだから。冒頭には、そのようなアイトルさんを送る言葉として、もっともふさわしい文章を掲げたつもりである。ここに描かれた光景は、かつて私が、人間に絶望した日本近代史のなかに見出した希望のひとつである。

アイトルさんは、自由が与えられたものである限りにおいて、所詮、「ウオエンノプレニク」(俘虜)の自由にすぎないことを教えてくれた。なにより、モンゴルの人びとと共に、魂の存在を信じさせてくれた。私は、アイトルさんと出会い、やはり幸いだったのである。

アイトルさん、ありがとう。Баярлалаа ахаа.

〔付記〕冒頭に掲げた文章は、1947年暮れ、カザフスタン共和国カラカンダにあった日本人俘虜収容所における二人だけの「学芸同好会」の様を描いた一節である。著者である菅季治は、1950年にいわゆる徳田（球一）要請問題で証人として国会に喚問されたのち、自死した人物、文中の「K」とは、1954年にシベリアから帰還した翌年、心臓麻痺で死亡した鹿野武一のことで、詩人石原吉郎の抑留体験とその論考に決定的な影響を与えた人物である。石原は、シベリア抑留中の鹿野の姿を描いた「ペシミストの勇氣」の「追記」にこの文章を引用し、

舞鶴上陸後、「K」が鹿野であることを本人に直接確認したと書いている（『望郷と海』筑摩書房、1972年、所収。ただし、テキスト本体の初出は『思想の科学』第5次第100号、思想の科学社、1970年4月）。